

月崎下層式土器の再評価

今 福 拓 哉

1. はじめに

月崎下層式土器は刺突文および押引刺突文を特徴とし、条痕調整の著しい縄文時代前期後葉の土器型式（竹広1996）であり、山陰地方や西部瀬戸内に分布し、一定程度の拡がりをもつ。中部瀬戸内の彦崎 Z1式と施文などの類似性が指摘されている（宮本1993a）。岡山県里木貝塚では、里木 I 式に彦崎 Z1式が先行するという層位事例から、彦崎 Z1式→里木 I 式と編年されている（倉敷考古館1971）。そのため、彦崎 Z1式と親縁性の強い月崎下層式も、彦崎 Z1式の層位事例からこの序列とされてきた。

しかし、縄文施文を施す里木 I 式と条痕調整を施す月崎下層式という異なる系統の土器型式が層位的に完全に分離した出土事例はなく、時系列的に単純な前後関係をもつとは言い難い。そのため、月崎下層式が里木 I 式や後出する大歳山式にまたがって存続する可能性は否定できない⁽¹⁾。山陰地方の月崎下層式の出土状況を見ると、磯ノ森式（北白川下層 II a・II b 式）、里木 I 式（北白川下層 III 式）および大歳山式といった従来の編年観で前後に位置付けられる土器型式と層位的に共伴して出土する事例が大半を占める。なお、島根県飯石郡飯南町下山遺跡出土の月崎下層式出土遺構⁽²⁾の放射性炭素年代測定（AMS）では前期末の年代が示されている（島根県古代文化センター 2014）。里木 I 式～大歳山式期並行の時期比定が可能である。また、飯南町所在の上ノ谷遺跡では三瓶山の噴火で堆積した火山灰（三瓶角井降下火山灰：第 2 ハイカ）の上層（第 2 黒色土）から月崎下層式が出土している（第 1 図）⁽³⁾。第 2 黒色土は三瓶山周辺の発掘調査では大歳山式以降の土器型式が確認されている土層である。

このような状況から月崎下層式は、里木 I 式に先行して出現するものの、近年の調査・研究により一定程度の存続幅をもつ土器型式である可能性が高いと考えられる。そこで、本稿では月崎下層式の再評価を試みたい。

2. 月崎下層式に関する研究史

月崎下層式は山口県宇部市に所在する月崎遺跡の下層から出土した土器群を基に設定された土器型式である。月崎遺跡は周防灘に面した丸尾湾の海岸砂丘に立地し、1961年以降、山



第 1 図 上ノ谷遺跡出土月崎下層式土器 (S=1/3)

口大学と広島大学によって発掘調査が実施されている。調査によって2層(上層および下層)の包含層が確認され、縄文時代前期から晩期の遺物が出土している。調査実施者である潮見浩氏により下層出土遺物はⅠ～Ⅳ類に分類されている(潮見1980)。月崎下層式Ⅰ～Ⅲ類が縄文時代前期の土器群であり、同Ⅳ類は中期船元式に比定される。このうち、Ⅱ類が刺突文と押引刺突文を特徴とする土器群であり、竹広文明氏により再整理が行われている(竹広1996)。竹広氏は月崎下層式Ⅱ類が押引刺突文と文様帯以外の顕著な条痕を特徴とし、瀬戸内と九州の接点の様相を示す地域性の強い土器と指摘している。また、同様に押引刺突文を特徴とする彦崎Z1式との区別については、条痕調整の有無により区別できるとしている。このような竹広氏による月崎下層式の整理をふまえ、柳浦俊一氏による月崎下層式の抽出・分類が実施されている。

柳浦氏は月崎遺跡下層出土の前期土器群(月崎下層式Ⅰ～Ⅲ類)の内、Ⅰ類が西川津式および轟式、Ⅲ類が曾畑式であることからⅡ類を「月崎下層式」として設定し、山陰出土資料をもとに諸属性を整理・細分している(柳浦2001)。器形および口縁部形態の特徴を抽出するほか、施文方法や施文原体などにも着目し、文様は刺突文および押引刺突文がいずれも口縁部に深く施文され、刺突文は上方・下方・斜方向から刺突し、工具は先端が方形のものを主体とすると指摘している。工具幅は2mm程度の狭いものと3mm～4mmの幅広のものがあり、口縁部に沿って列点状や羽状に施されるとしている。また、押引刺突文については、横方向に施文され、直線状・波状のモチーフを呈するものが一般的であると整理している。器面調整は、条痕が明瞭に残るもの、なで調整が施され条痕調整を部分的に残すもの、なで調整により条痕がほとんど消去されるものに区分している。このような月崎下層式の諸属性をふまえ、条痕の残存状況や施文方法、施文原体の大きさに着目し、以下の細分を実施している。

- [第1段階]** 小さな原体で下方・上方からの刺突文が施され、羽状に配されることがある。口縁部が外反するもののほかに、屈曲口縁がある。条痕が比較的明瞭。
- [第2段階]** 小さな原体で押引刺突文が施され、波状のモチーフが出現する。刺突文と押引刺突文の併用もある。施文部分内面の条痕は消える傾向があるが、明瞭に残るものもある。
- [第3段階]** 大きな原体で押引刺突文が施され、押引が内面に反映されて膨らむものが多い。屈曲口縁はなくなるようである、施文部分内面はなで調整で条痕が消されるものが多い。

柳浦氏の細分は、月崎下層式の中で刺突文が先行して出現すること、施文原体の大きさの変化をふまえた分類であり、月崎下層式が一定程度の時期幅を持つ可能性を示唆するものである。また、彦崎Z1式との関連性から月崎下層式の年代的位置についても言及しており、北白川下層Ⅲ式(里木Ⅰ式)に先行する土器型式である北白川下層Ⅱc式を土器型式の主体としない山陰西部では、この時期に西部瀬戸内で出現した月崎下層式が分布を広げたとしている。なお、彦崎Z1式の存続期間をそのまま月崎下層式の存続幅とするのではなく、山陰地方では北白川下層Ⅱb式・Ⅲ式と月崎下層式が混在する可能性も示唆している。

柳浦氏のほか、宮本一夫氏も月崎下層式に言及している⁽⁴⁾。宮本氏は、瀬戸内地方を中心として確認できる縄文時代前期後葉の刺突文系土器について、西部瀬戸内の月崎下層式と中部瀬戸内の彦崎 Z1 式を異なる土器型式として位置付け、縄文時代前期の土器編年を試みている。この中で刺突文系土器は西部瀬戸内地域の出土状況をふまえ、北白川下層 II 式併行に位置付けている。また、江口貝塚出土資料を基に、北白川下層 II a・II b 式（中部瀬戸内：磯ノ森式）に刺突文を施す江口 Z9 類が並行し、北白川下層 II c 式（中部瀬戸内：彦崎 Z1 式）に押引刺突文を施す江口 Z10 類が並行することを指摘している（宮本1993b）。なお、彦崎 Z1 式の成立については、曾畑式の影響を受けて西部瀬戸内で成立した刺突文系土器が中部瀬戸内地域で主流となる磯ノ森式と融合することで成立したとしている。宮本氏の指摘する刺突文系土器は月崎下層式に比定することができ、月崎下層式が北白川下層 II a・II b 式期からすでに存在することを想定できる。

以上のように、月崎下層式は彦崎 Z1 式との対比関係を根幹とし、縄文時代前期後葉の土器型式として認識されているといえる。しかしながら、柳浦氏や宮本氏が指摘するように、山陰地方や西部瀬戸内地域での出土状況を概観すると、前後の土器型式と混在する状況を示しており、先述したように縄文時代前期末の大歳山式との共伴事例も確認できている。このような出土事例をふまえ、本稿では月崎下層式について、あらためて整理を実施し、その様相について検討を行いたい。なお、潮見氏により月崎下層式は I～IV 類に分類されているが、先行研究に従い、刺突文および押引刺突文を特徴とする II 類を「月崎下層式」として本稿では扱いたい。

3. 月崎遺跡出土「月崎下層式」の諸相

(1) 月崎遺跡について

本章では、月崎下層式の型式設定の基本となる月崎遺跡出土土器群の諸相の整理を試みたい。前章で述べたように、月崎遺跡は山口県宇部市に所在する縄文遺跡である。昭和31(1956)年に小野忠瀨氏によって発見され、昭和36(1961)・昭和37(1962)年に山口大学と広島大学によって発掘調査が実施されている。日ノ山(標高146m)の東南麗の汀線に近く、東にひらいた小湾頭の海岸砂丘に立地し、周辺には美濃ヶ浜遺跡などの縄文遺跡が多く存在している。月崎遺跡および美濃ヶ浜遺跡は出土遺物に共通要素が強く認められ、周防灘に面した丸尾湾に分布する縄文遺跡群の中核をなすものと指摘されている(潮見1980)。月崎遺跡では調査によって2層(上層および下層)の包含層が確認され、縄文時代前期から晩期の遺物が出土している。潮見氏により下層出土土器は4つに分類されており、現在の土器編年観に則すると I 類が西川津式および轟式、II 類が月崎下層式、III 類が曾畑式、IV 類が船元式となる。これらの月崎遺跡下層出土の土器群のうち、II 類について次節で諸相を整理する。

(2) 月崎遺跡出土「月崎下層式」の諸相

現在、月崎遺跡下層出土の土器群のうち、潮見氏により II 類として分類された土器群が「月崎下層式」として土器型式に設定されている。これらの下層 II 類土器群を詳細にみていくと、



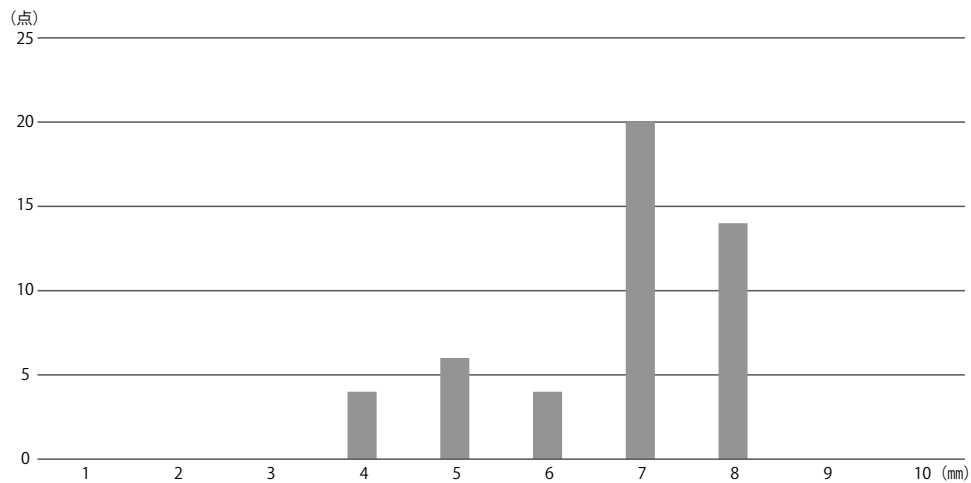
第2図 月崎遺跡下層Ⅱ類土器 (S=1/3)

複数の属性により細分することが可能である。本項では差異が抽出できる属性とその様相について説明し、細分を実施したい。抽出する属性は、口縁部の施文方法、口唇部への施文、器壁厚であり、明瞭な差異を示している。以下、各属性とその様相について説明する。

口縁部の施文方法 (第2図) 口縁部への施文方法として、刺突による施文 (第2図1～3) と押引刺突による施文 (第2図4～35) がある。刺突は基本的に上から下方向にかけて施されており、押引刺突が横方向の施文を基本とする点と差異が認められる。なお、月崎遺跡で出土する月崎下層式の多くが押引刺突による施文である。

口唇部への施文 (第2図) 口唇部への施文については、施文が施されないもの (第2図1・2・4～26)、沈線や刺突による施文を施すもの (第2図3・27～35) が認められる。口唇部は無文の資料が多いものの、口唇部へ施文を施すものも一定程度確認できる。

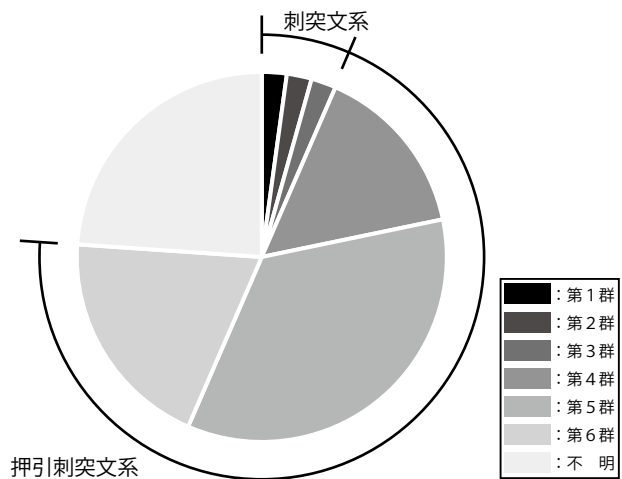
器壁厚 (第2・3図) 器壁厚については、口縁部付近の厚みを基に差異の抽出を行った。その結果、4mmから8mmまでの資料を確認できた (第3図)。7～8mmの器壁厚をもつ資料が大半であるものの、4～6mmの比較的器壁の薄い資料も存在していることがわかる。また、



第3図 月崎遺跡下層Ⅱ類土器器壁分布図

4～6 mmの器壁厚の中でも5 mmの器壁厚にピークが存在する。以上のことから、器壁が6 mm未満（第2図1・3～10）と6 mm以上（第2図2・11～35）に区分することが可能である。

以上のように、月崎遺跡出土の月崎下層式について、差異が明瞭な属性を抽出し、様相の整理を実施した。その結果、口縁部の施文については刺突文と押引刺突文、口唇部については施文の有無に区分可能である。また、器壁厚については6 mmを境に2分できる。



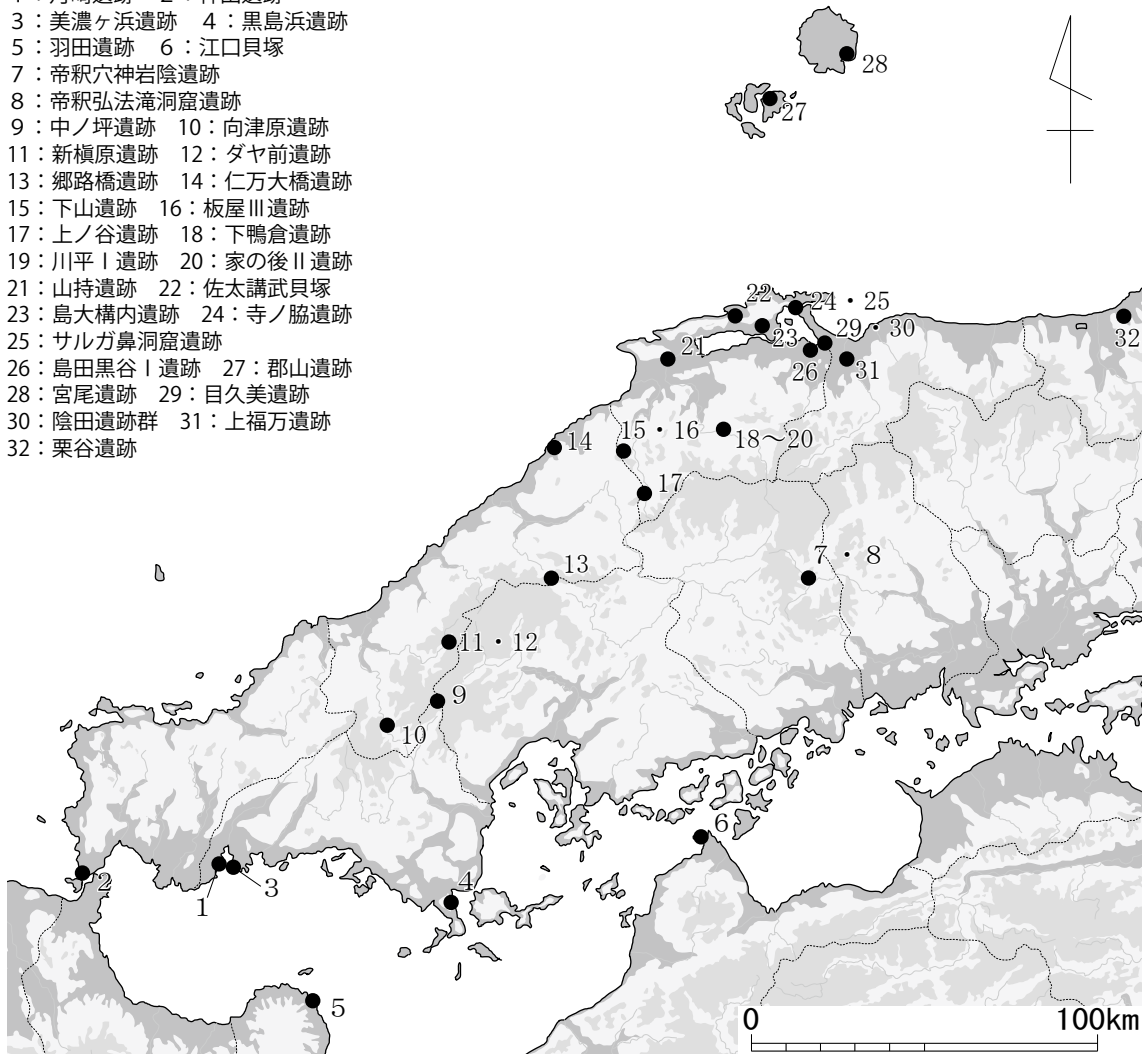
第4図 月崎遺跡下層Ⅱ類土器分布

これらの属性の諸相を基に、月崎遺跡出土の月崎下層式を細分すると以下のような6つの土器群に細分可能である（第2図）。

- 第1群 口縁施文：刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm未満（第2図1）
- 第2群 口縁施文：刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm以上（第2図2）
- 第3群 口縁施文：刺突 口唇施文：有 器壁：6 mm未満（第2図3）
- 第4群 口縁施文：押引刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm未満（第2図4～10）
- 第5群 口縁施文：押引刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm以上（第2図11～26）
- 第6群 口縁施文：押引刺突 口唇施文：有 器壁：6 mm以上（第2図27～35）

これらのうち、第4～6群とした押引刺突文系の土器群が月崎遺跡では大半を占め、その中でも口唇部の施文の有無により2つのグループが確認できる（第4図）。以上のように、月崎下層式として設定できる土器群の中でも複数の属性の差異を抽出することで細分が可能である。このような月崎下層式の細分について、筆者は時期差を表現していると想定している。つまり、月崎遺跡出土土器群の分類のように、複数の属性の諸相から月崎下層式の型式

- 1：月崎遺跡 2：神田遺跡
- 3：美濃ヶ浜遺跡 4：黒島浜遺跡
- 5：羽田遺跡 6：江口貝塚
- 7：帝釈穴神岩陰遺跡
- 8：帝釈弘法滝洞窟遺跡
- 9：中ノ坪遺跡 10：向津原遺跡
- 11：新槇原遺跡 12：ダヤ前遺跡
- 13：郷路橋遺跡 14：仁万大橋遺跡
- 15：下山遺跡 16：板屋Ⅲ遺跡
- 17：上ノ谷遺跡 18：下鴨倉遺跡
- 19：川平Ⅰ遺跡 20：家の後Ⅱ遺跡
- 21：山持遺跡 22：佐太講武貝塚
- 23：島大構内遺跡 24：寺ノ脇遺跡
- 25：サルガ鼻洞窟遺跡
- 26：島田黒谷Ⅰ遺跡 27：郡山遺跡
- 28：宮尾遺跡 29：目久美遺跡
- 30：陰田遺跡群 31：上福万遺跡
- 32：栗谷遺跡



第5図 月崎下層式土器分布図

内での編年を提示できると考えている。このような編年の可能性について、次章以降で検討を行う。

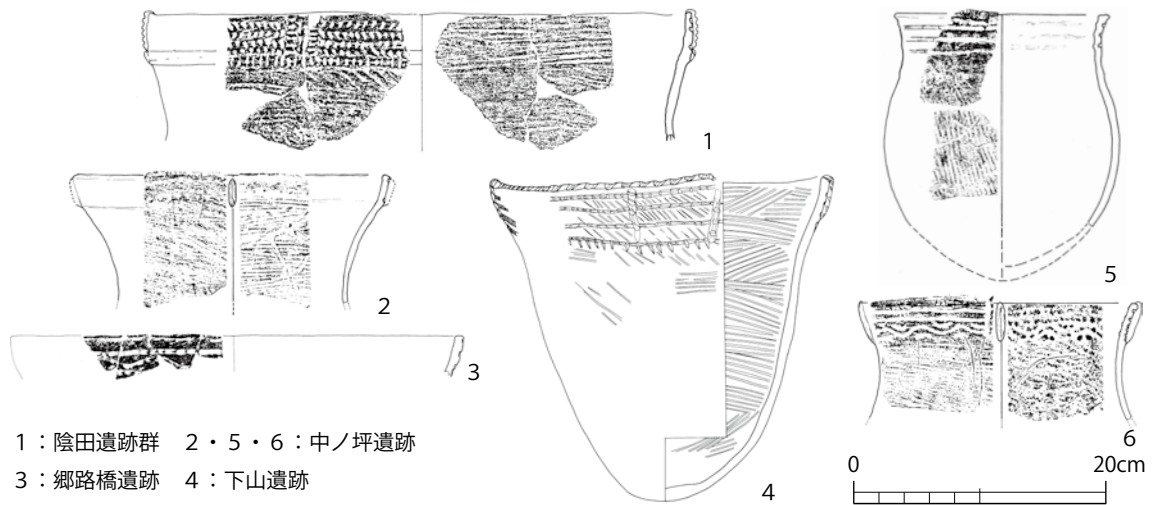
4. 分類の提示

本章では、月崎遺跡で確認できた月崎下層式の分類について、より広域での出土資料を基に実施する。また、月崎下層式には垂下隆帯や円形浮文が確認できる資料も存在する。これらの隆帯および浮文についても確認する。なお、本論で対象とした資料については第5図および第1表を参考にされたい。

(1) 月崎下層式の整理

本節では、月崎下層式について改めて属性の整理を行う。抽出する属性として、分布域・器形・器壁・調整・施文・隆帯および円形浮文の様相を挙げ、整理を試みたい。

分布域 (第5図) 山陰地方を中心とし、中国地方山間部および西部瀬戸内地域での分布を確認した。当該期の山陰・西部瀬戸内地域は、九州地方に広く分布する曾畑式および近畿地



1：陰田遺跡群 2・5・6：中ノ坪遺跡
3：郷路橋遺跡 4：下山遺跡

第6図 月崎下層式土器の基本器形 (S=1/6)



第7図 口唇部の形状

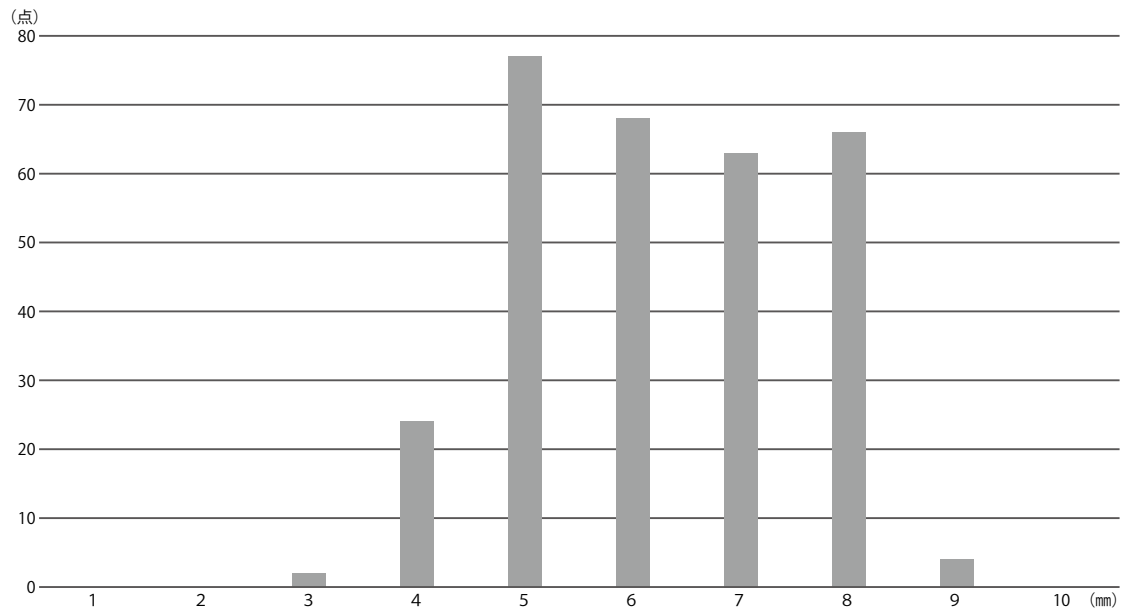
方を中心として広域に分布する北白川下層式の分布境界であり、双方の土器文化圏が混在して確認できる地域である。条痕調整を主体とする曾畑式と縄文施文を主体とする北白川下層式という異系統の土器が混在するという、境界地域に分布している点が特徴として挙げられる。

器形 (第6・7図) 月崎下層式の基本的な器形として、柳浦氏が指摘 (柳浦2001・2017) するように、口縁部は施文直下付近で屈曲するもの (第6図1・2) と外反 (第6図5・6) または内湾するもの (第6図3・4) が認められる。頸部から口縁部にかけては外反し、胴部は張らないものが多く確認できる。底部は丸底となる。口唇部の形状はバリエーションが認められ、端部を丸くおさめるものと平坦となるものが存在し、それぞれ内外に拡張する (第7図)。なお、口唇部が拡張するものは基本的に端部へ施文を施している。

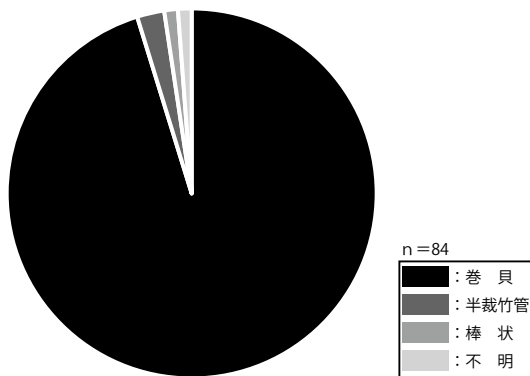
器壁 (第8図) 器壁は口縁部付近で3mm～9mmのものが確認できる。比較的器壁が薄く、中部瀬戸内地域の彦崎Z1式と類似する厚みとなるもののほか、器壁が厚い一群も確認できる。基本的には5～6mmをピークとし、6mm以上の器壁が厚いものを主体とするが、6mm未満の器壁となるものも一定数確認できる。

調整 月崎下層式の器面調整については、竹広氏らが指摘 (竹広1996) するように二枚貝による条痕調整を基本とする。ただし、口縁部外面の施文付近へのナデ調整により条痕調整が確認できない個体も存在する。なお、条痕調整については、内面はおおむね横方向に施され、外面は横方向を主体とするが、斜交および縦方向のものも存在する。

施文 (第9・10図) 刺突文および押し刺突文が確認できる。ただし、口縁部付近に施文



第8図 月崎下層式土器器壁分布図



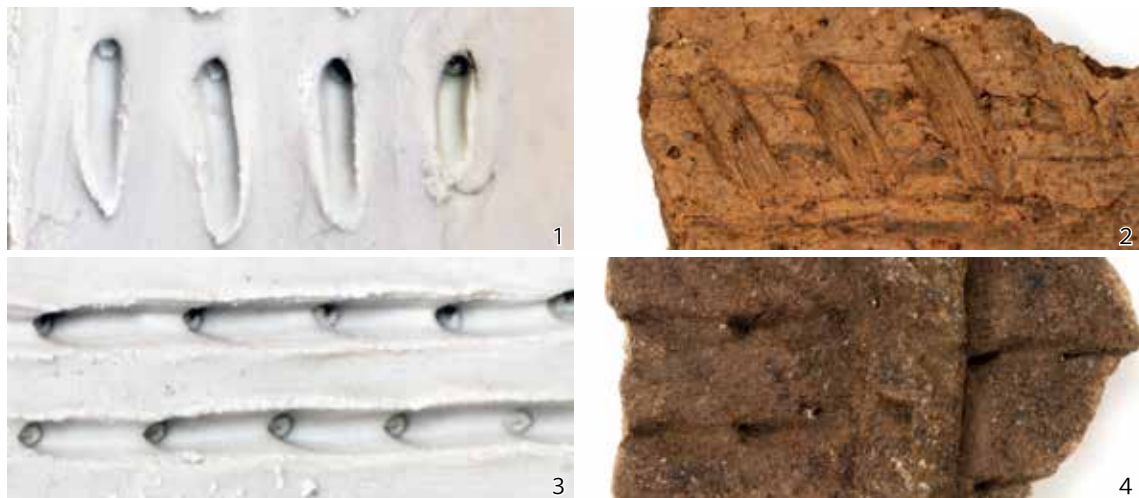
第9図 施文具の選択

が施されないものも一定数認められる。実見した資料をふまえると、刺突文は上から下方向に施される⁽⁵⁾。押引刺突文は、横方向に施される場合、左から右方向、縦方向に施す場合、上から下方向に施す状況が確認できる。また、施文原体については、巻貝を主体とし、半裁竹管状工具による施文は基本的には施されない状況を確認した(第9・10図)。なお、親縁性が指摘されている彦崎 Z1式は半裁竹管

状工具を基本とした施文を施しており、両型式で主体となる施文原体に差異が認められる⁽⁶⁾。**垂下隆帯および円形浮文(第11図)** 垂下隆帯(第11図9~18)および円形浮文(同図3~8)を施す資料が認められる。これらの資料は、基本的に波状口縁の波頂部や突起状口縁の突起部に施される状況が確認できる。なお、波状口縁の波頂部や突起状口縁の突起部下方に施される施文には、周囲の施文と異なる意匠となるものもある(第11図1・2)。これらのような施文による波頂部や突起部の強調が垂下隆帯や円形浮文へと変容した可能性も考えられる。また、垂下隆帯上に刻目などの施文を施す資料(第11図12~18)も存在する。

(2) 分類の提示

前節で月崎下層式について、基本的な整理を実施した。本節では分類を試みる。分類を実施する際に抽出する属性は、口縁部の施文、口唇部施文の有無、器壁厚を基に分類を実施した。口縁部の施文については、刺突・押引刺突・無文が認められる⁽⁷⁾。器壁厚については、月崎遺跡出土資料同様に5mmにピークが存在し、以降一定程度の資料が確認できる(第8図)。このことをふまえ、6mmを境界とし、2分した。これらの属性を組み合わせ、以下のとおり



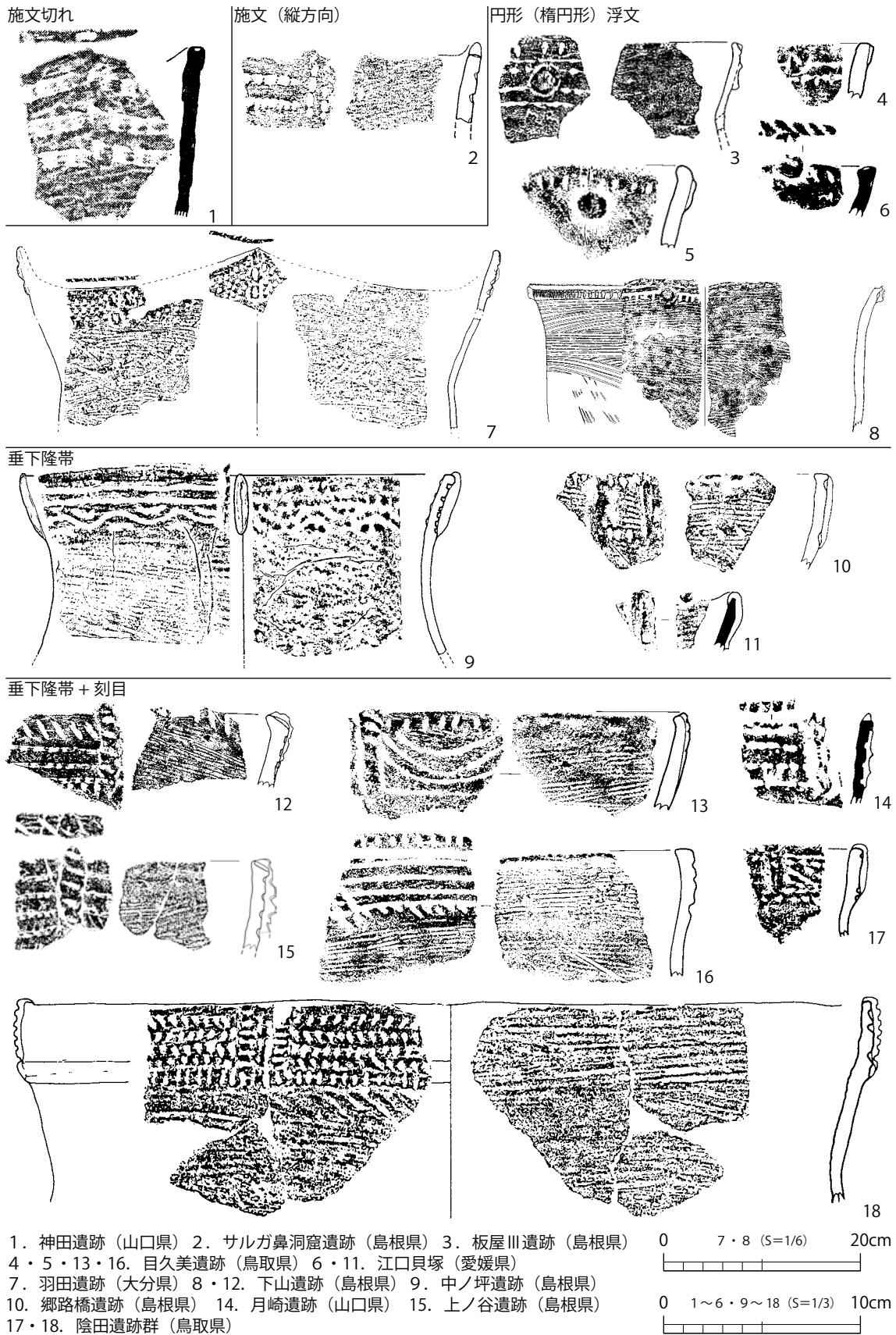
1・2：巻貝による刺突文（上→下方向） 3・4：巻貝による押引刺突文（左→右方向）
2：郷路橋遺跡出土 4：上ノ谷遺跡出土

第10図 巻貝による施文とその方向

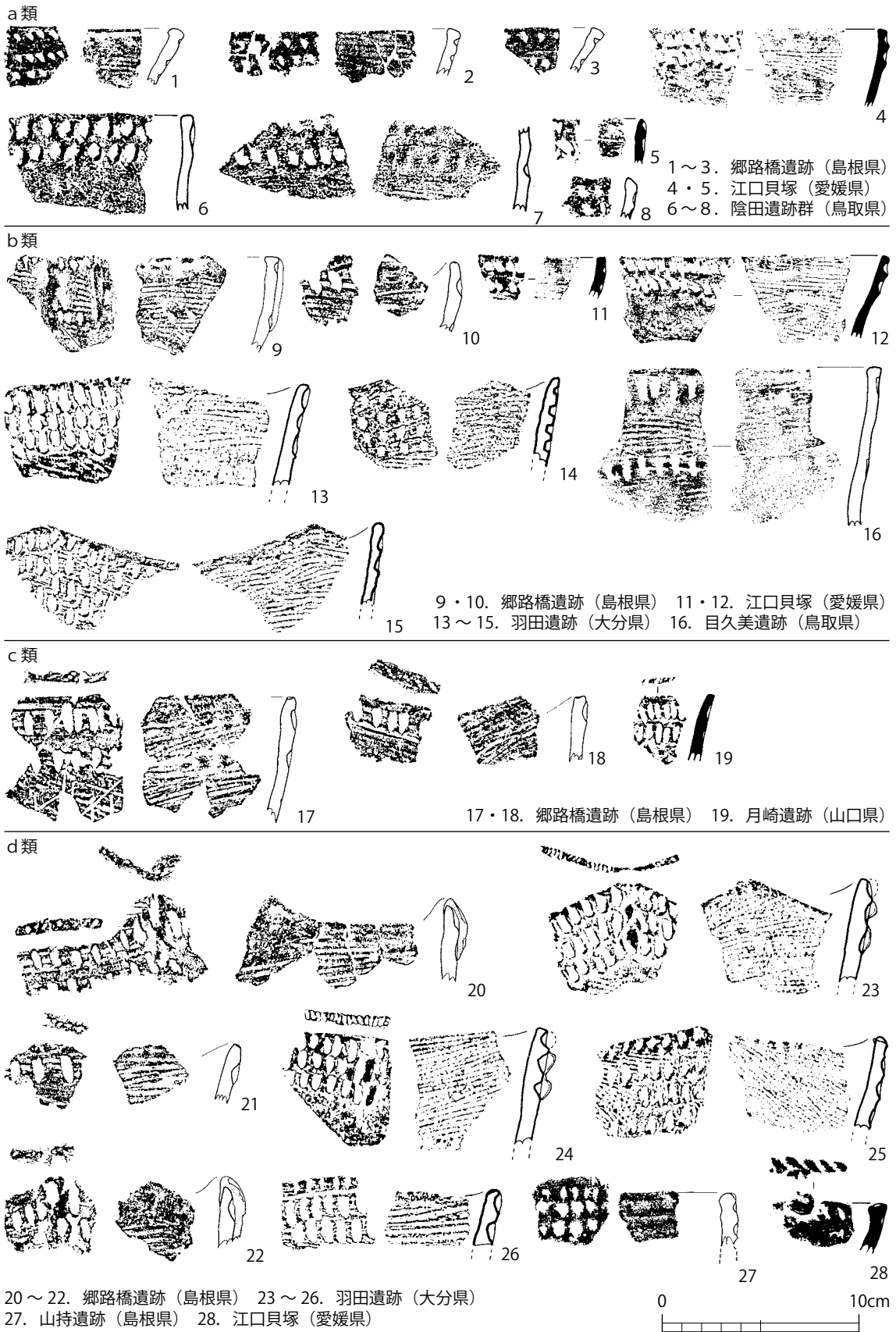
に a 類～ l 類の12群に区分した（第12～14図・第1表）⁽⁸⁾。

- a 類 口縁施文：刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm未満（第12図1～8）
- b 類 口縁施文：刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm以上（第12図9～15）
- c 類 口縁施文：刺突 口唇施文：有 器壁：6 mm未満（第12図17～19）
- d 類 口縁施文：刺突 口唇施文：有 器壁：6 mm以上（第12図20～28）
- e 類 口縁施文：押引刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm未満（第13図1～13）
- f 類 口縁施文：押引刺突 口唇施文：無 器壁：6 mm以上（第13図14～23）
- g 類 口縁施文：押引刺突 口唇施文：有 器壁：6 mm未満（第13図24～28）
- h 類 口縁施文：押引刺突 口唇施文：有 器壁：6 mm以上（第13図29～36）
- i 類 口縁施文：無文 口唇施文：無 器壁：6 mm未満（第14図1～5）
- j 類 口縁施文：無文 口唇施文：無 器壁：6 mm以上（第14図6～11）
- k 類 口縁施文：無文 口唇施文：有 器壁：6 mm未満（第14図12～15）
- l 類 口縁施文：無文 口唇施文：有 器壁：6 mm以上（第14図16～23）

口縁部へ刺突文を施す土器群のうち、a 類は島根県郷路橋遺跡や愛媛県江口貝塚などで出土しているが、確認できる遺跡数は少ない。また、各遺跡で数点確認できるのみで全体的な出土量も少ない。b 類は島根県中ノ坪遺跡や郷路橋遺跡、鳥取県目久美遺跡、愛媛県江口貝塚、大分県羽田遺跡などで出土している。比較的確認できる遺跡数は多いものの、基本的には各遺跡で数点確認できる状況である。ただし、大分県羽田遺跡では月崎下層式の主体となっている。c 類は鳥取県陰田遺跡群、山口県月崎遺跡、愛媛県江口貝塚などで確認できる。資料が少なく、a 類の状況もふまえると、器壁厚が6 mm未満の刺突文系土器群の口唇部への施文は基本的には行われたい状況を想定できる。d 類も確認できる遺跡数は少なく、島根県郷路橋遺跡、愛媛県江口貝塚、大分県羽田遺跡などで確認でき、郷路橋遺跡や羽田遺跡で比較的まとまって出土している。ただし、c 類同様に確認できる資料は少なく、口縁部付近へ

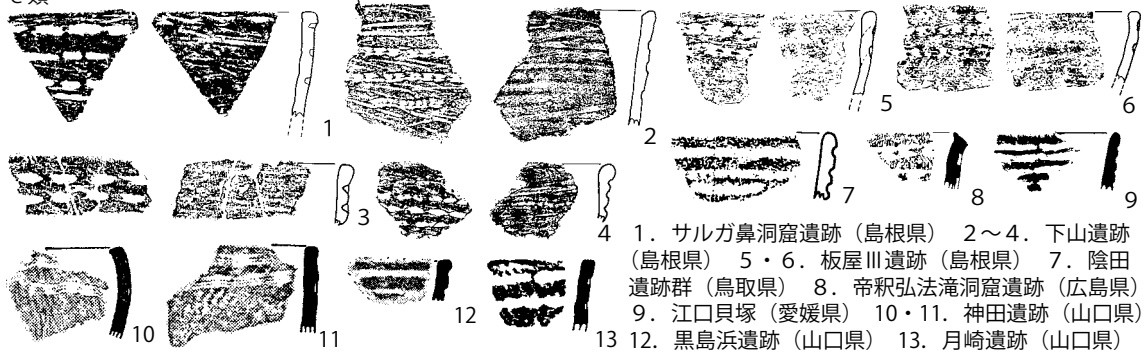


第11図 垂下降帯および円形浮文



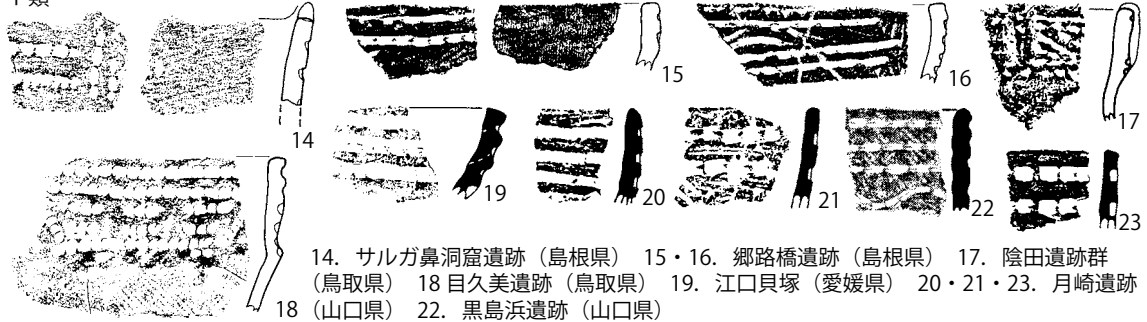
第12図 月崎下層式土器の分類 (1) (S=1/3)

e類



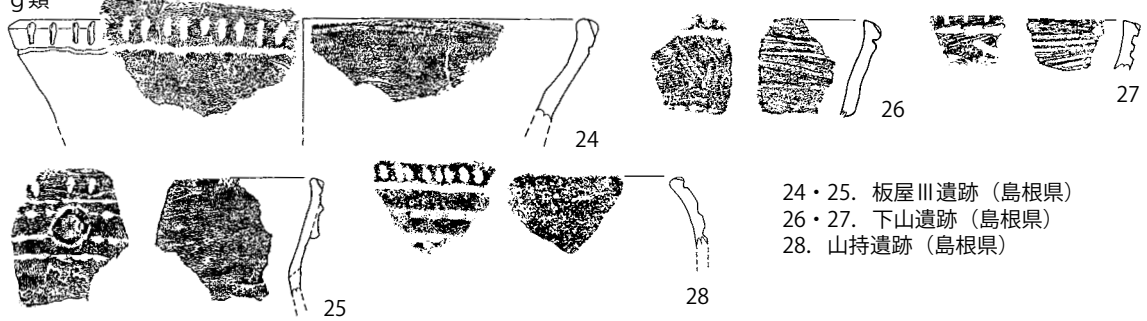
- 1. サルガ鼻洞窟遺跡 (島根県) 2~4. 下山遺跡 (島根県) 5・6. 板屋Ⅲ遺跡 (島根県) 7. 陰田遺跡群 (鳥取県) 8. 帝釈弘法滝洞窟遺跡 (広島県) 9. 江口貝塚 (愛媛県) 10・11. 神田遺跡 (山口県) 12. 黒島浜遺跡 (山口県) 13. 月崎遺跡 (山口県)

f類



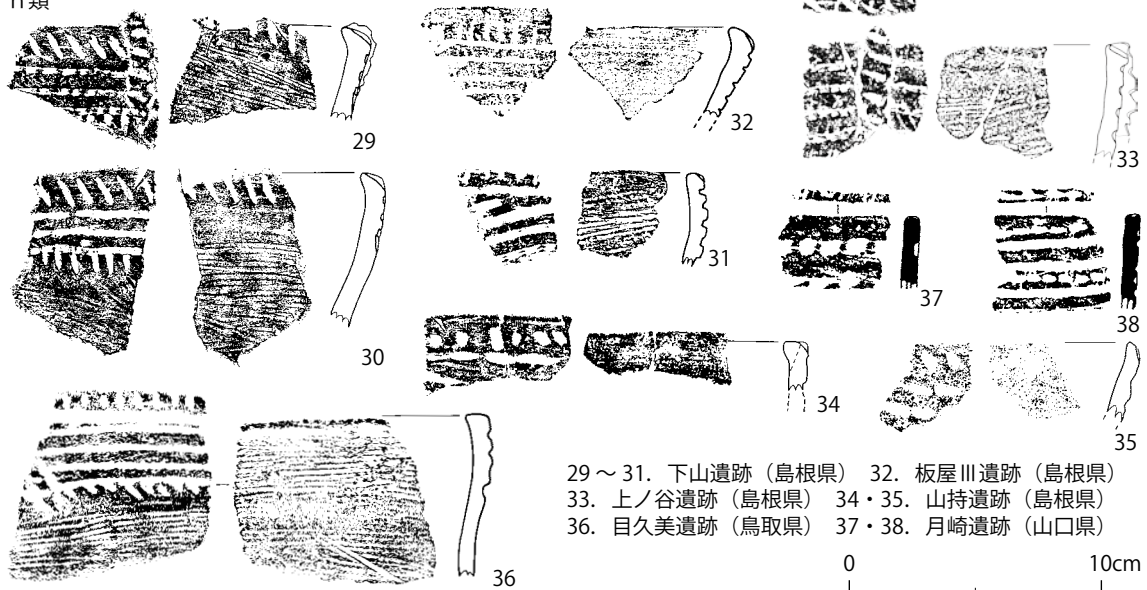
- 14. サルガ鼻洞窟遺跡 (島根県) 15・16. 郷路橋遺跡 (島根県) 17. 陰田遺跡群 (鳥取県) 18 目久美遺跡 (鳥取県) 19. 江口貝塚 (愛媛県) 20・21・23. 月崎遺跡 (山口県) 22. 黒島浜遺跡 (山口県)

g類



- 24・25. 板屋Ⅲ遺跡 (島根県) 26・27. 下山遺跡 (島根県) 28. 山持遺跡 (島根県)

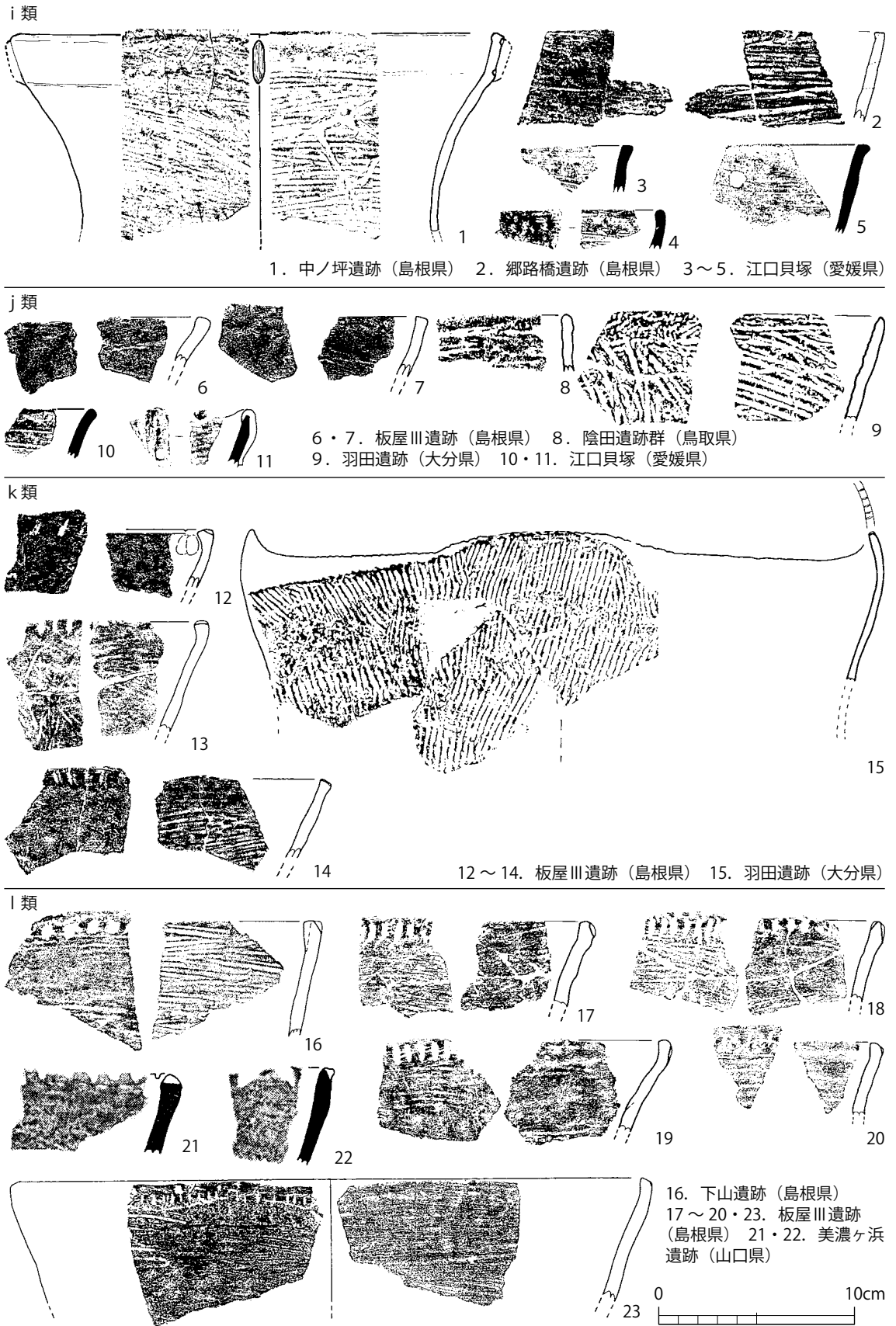
h類



- 29~31. 下山遺跡 (島根県) 32. 板屋Ⅲ遺跡 (島根県) 33. 上ノ谷遺跡 (島根県) 34・35. 山持遺跡 (島根県) 36. 目久美遺跡 (鳥取県) 37・38. 月崎遺跡 (山口県)



第13図 月崎下層式土器の分類 (2) (S=1/3)



第14図 月崎下層式土器の分類 (3) (S=1/3)

の刺突施文と、口唇部への施文の相関性は希薄であるといえる。

口縁部へ押し刺突文を施す土器群のうち、e類は島根県中ノ坪遺跡、下山遺跡、板屋Ⅲ遺跡、山口県月崎遺跡、愛媛県江口貝塚などで認められる。多くの遺跡で出土しているが、各遺跡で数点確認できる程度である。ただし、下山遺跡や月崎遺跡では比較的まとまって出土しており、月崎下層式の主体的な土器群の一つといえる。f類は島根県中ノ坪遺跡、郷路橋遺跡、鳥取県目久美遺跡、陰田遺跡群、山口県月崎遺跡、愛媛県江口貝塚などで出土している。多くの遺跡で確認でき、月崎遺跡では主体となるなど、e類同様に月崎下層式の中心的な土器群の一つであることが考えられる。g類は島根県中ノ坪遺跡・下山遺跡・山持遺跡などで出土している。比較的多くの遺跡で確認できるものの、ほかの押し刺突文系土器群と比較すると相対的に資料数が少ない。c類同様に器壁が薄いことをふまえると、器壁厚と口唇部への施文に相関性が指摘できる。h類は遺跡数および資料数ともに最も多く、島根県下山遺跡、上ノ谷遺跡、鳥取県目久美遺跡、山口県月崎遺跡などで確認できる。月崎下層式土器の中心的な土器群といえ、山陰地方に多くの資料が集中する状況を認められる。

口縁部への施文が施されない土器群のうち、i類は島根県中ノ坪遺跡、郷路橋遺跡、愛媛県江口貝塚で確認できる。遺跡数は少ないものの、江口貝塚でまとまって出土している。j類は島根県板屋Ⅲ遺跡、鳥取県陰田遺跡群、愛媛県江口貝塚、大分県羽田遺跡で認められる。i類同様、確認できた遺跡数は少なく、資料数も数点のみである。k類は島根県板屋Ⅲ遺跡、島大構内遺跡、大分県羽田遺跡で確認できる。j類などと同様に遺跡数および資料数は少ない。l類は島根県下山遺跡、板屋Ⅲ遺跡、山口県美濃ヶ浜遺跡などで確認できる。無文系土器群の中で資料数は最も多く、板屋Ⅲ遺跡でまとまって出土している。i類～l類の無文系土器群については、月崎下層式の特徴である刺突文や押し刺突文が施されないため、同型式の土器群として認識しにくく、有文系土器群に対し資料数が少ない。しかし、板屋Ⅲ遺跡などでは有文土器群とともに出土し、口唇部やプロポーシヨンの類似から同型式と認識できる。月崎下層式に刺突・押し刺突の有文系土器群のみでなく無文系土器群が存在することを指摘できる。

5. 各分類と他の土器型式との共伴関係

前章で月崎下層式について、口縁部の施文、口唇部の施文、器壁厚により分類を実施した。本章では層位事例をもとに各分類と他の土器型式との共伴関係を整理したい。

(1) 三瓶山周辺（板屋Ⅲ遺跡・下山遺跡・上ノ谷遺跡）

島根県大田市・飯南町に所在する三瓶山は約10万年前に活動を始めた活火山で、過去に数回の活動期が確認できる⁽⁹⁾。板屋Ⅲ遺跡の発掘調査などにより縄文時代に3回の噴火活動を繰り返したことが層位的に明らかになっている。三瓶山周辺地域で噴火に関連した噴出物（ハイカ）が検出できる遺跡のうち、月崎下層式が出土する遺跡は板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡、上ノ谷遺跡が挙げられる。月崎下層式は縄文時代の2回目の噴火により噴出した火山灰（三瓶山井降下火山灰：第2ハイカ）の前後に堆積する黒色土層から出土しており、この上層が第2

板屋Ⅲ・下山・上ノ谷	羽島下層Ⅱ式	羽島下層Ⅲ式	磯ノ森式	彦崎Z1式	里木Ⅰ式	大歳山式	轟B式	曾畑式	月崎下層式分類														
									a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類			
第3黒色土層																							
第2ハイカ層	三瓶角并降下火山灰(約5,500年前)																						
第2黒色土層																							

第15図 三瓶山周辺遺跡における月崎下層式と前後土器型式の共伴関係

郷路橋遺跡	曾畑式	北白川下層Ⅰb式	北白川下層Ⅱa式	里木Ⅰ式	月崎下層式分類																		
					a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類							
D・E区第3黒色土																							
D・E区第2黒色土																							

第16図 郷路橋遺跡における月崎下層式と前後土器型式の共伴関係

江口貝塚	Z1~Z6類	Z7類	Z8類	Z9~Z11類	月崎下層式分類													Z13・Z14類	Z15類			
	轟B式	羽島下層Ⅱ式	羽島下層Ⅲ式	月崎下層式	a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類	里木Ⅰ式	大歳山式				
13層																						
12層																						
11層																						
10層																						
SP群・SK1																						
9層																						
SD1																						
8層																						
7層																						
SX2																						
6層																						

第17図 江口貝塚における月崎下層式と前後土器型式の共伴関係

黒色土で縄文時代前期末から後期前葉、下層が第3黒色土で縄文時代早期から縄文時代前期後葉の土器型式を内包することが判明している。このことから、第2ハイカは土器型式から見れば、里木Ⅰ式期から大歳山式期に降下した火山灰と考えられる。つまり、第3黒色土中に出土する月崎下層式は里木Ⅰ式以前の土器型式、第2黒色土出土の月崎下層式は大歳山式以降の土器型式と層位的に共伴関係を持つことが想定できる(第15図)。

以上のような想定をふまえ、月崎下層式の出土状況を整理すると、板屋Ⅲ遺跡や下山遺跡では、第3黒色土でa類・c類・e類~h類・j類~l類の出土が確認できる。また、上ノ谷遺跡では、第2黒色土からh類が出土している。これらのことから、三瓶山周辺地域で出土する月崎下層式のうち、h類が大歳山式期以降も存続している状況を指摘できる。

(2) 郷路橋遺跡

郷路橋遺跡は島根県邑智郡邑南町に所在する。発掘調査により遺物を包含する複数の黒色土が確認できている⁽¹⁰⁾。D・E区第3黒色土で月崎下層式a類・b類、第2黒色土でb類~d類・f類・h類・i類が出土している。他区との土層対応や同一土層の出土状況から、第3黒色土出土月崎下層式(a類・b類)は曾畑式、北白川下層Ⅰb・同Ⅱa式(磯ノ森式)、第2黒色土出土月崎下層式(b類~d類・f類・h類・i類)は曾畑式および里木Ⅰ式と共伴関係をもつことが指摘できる(第16図)。

(3) 江口貝塚

江口貝塚は愛媛県今治市に所在する。愛媛大学により発掘調査が実施されており、縄文時代前期から中期にかけて複数の土器型式が層位的に出土している。縄文時代前期の土器は6

層から13層にかけて出土しており、宮本一夫氏により分類が行われている（宮本1993b）。宮本氏の分類のうち、Z9類～Z11類が月崎下層式、Z13類・Z14類が里木Ⅰ式、Z15類が大歳山式に比定できる（第17図）。これらの土器型式の層位的な共伴関係を整理すると、月崎下層式 a 類・b 類・e 類・f 類・i 類・j 類が里木Ⅰ式と共伴し、b 類～d 類が里木Ⅰ式および大歳山式と共伴することを指摘できる。また、大歳山式が里木Ⅰ式と共伴しない6層では、月崎下層式も出土しておらず、中期土器群と大歳山式が混在する状況と確認できる。なお、里木Ⅰ式を含まずに大歳山式と月崎下層式の2者のみが共伴する層位は認められない。そのため、刺突文を有する月崎下層式 b 類～d 類は里木Ⅰ式との同時性を示すと考えられる。

6. 考 察

前章までに月崎下層式を分類し、各分類と前後に存在する土器型式との層位的な共伴関係を確認した。本章では各分類と共伴する土器型式の整理を実施し、月崎下層式の存続時期の把握を行う。

(1) 月崎下層式の存続時期と型式内区分の設定

月崎下層式は里木Ⅰ式（北白川下層Ⅲ式）に先行する北白川下層Ⅱc式に並行する土器型式として認識（柳浦2001・2017ほか）されているが、層位事例の確認を実施した結果、郷路橋遺跡で北白川下層Ⅰb・Ⅱa式と刺突文系土器群であるa類・b類が層位的に共伴し、これらが他の類と分離し、下層から出土していることを確認した。一方で、江口貝塚の層位事例では北白川下層Ⅰb式と並行関係となる羽島下層Ⅲ式と月崎下層式は共伴していない。このことから、月崎下層式のうち、刺突文系土器群が他の土器群に先行して出現し、北白川下層Ⅱa式（磯ノ森式）と並行関係である可能性が高いことを指摘できる。なお、宮本氏もこれらの刺突文系土器群を西部瀬戸内の縄文前期Ⅲ段階古に設定しており、中部瀬戸内の磯ノ森式と並行関係を有することを指摘している（宮本1993a）。

北白川下層Ⅲ式との並行関係については、層位事例が判明する資料の大部分で共伴することを確認している。出土が集中する三瓶山周辺遺跡では、月崎下層式土器に付着していた炭

九州地方	近畿地方	中部瀬戸内	山陰地方	月崎下層式分類												
				a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類	
轟B式	粟津湖底SZ	轟B式	長山馬籠式													
			西川津A式													
			西川津B式													
	勝山式		(竹ノ花)													
曾畑式	羽島下層Ⅱ式	羽島下層Ⅱ式	羽島下層Ⅱ式													
	北白川下層Ⅰa・b式	羽島下層Ⅲ式	羽島下層Ⅲ式													
	北白川下層Ⅱa・b式	磯ノ森式	磯ノ森式													
	北白川下層Ⅱc式	彦崎Z1式	(月崎下層式)													
	北白川下層Ⅲ式	里木Ⅰ式	里木Ⅰ式													
	大歳山式	大歳山式	大歳山式													

第18図 月崎下層式の存続期間と土器編年

化物の年代測定が実施され、里木Ⅰ式期から大歳山式期の降下火山灰（第2ハイカ）直前の年代が与えられている（島根県古代文化センター2014）。このことから、北白川下層Ⅱc式に後続する里木Ⅰ式（北白川下層Ⅲ式）と月崎下層式が並行関係を有することを指摘できる。なお、北白川下層Ⅱc・Ⅲ式に並行する月崎下層式は、刺突文系土器群（a～d類）、押引刺突文系土器群（e～h類）、無文系土器群（i～l類）であり、バリエーションが認められる⁽¹¹⁾。

北白川下層Ⅲ式以降の土器型式と月崎下層式の並行関係については、三瓶山周辺の上ノ谷遺跡で把握が可能である。先述したように、里木Ⅰ式期から大歳山式期に降下した火山灰である第2ハイカより上層から月崎下層式が数点ながら出土しており、大歳山式期にも月崎下層式が存続している可能性を指摘できる⁽¹²⁾。なお、確認できた資料はすべてh類である。

以上のように、月崎下層式の細分とこれらに層位的に共伴する土器型式の整理を実施した結果、北白川下層Ⅱa・Ⅱb式期～大歳山式期にかけて月崎下層式が存続することを確認した。また、これらの土器型式との共伴関係から、下記のとおり月崎下層式を3段階に区分することが可能である（第18図）。

Ⅰ期：北白川下層Ⅱa・Ⅱb式並行期（刺突文系土器群出現期（a・b類））

Ⅱ期：北白川下層Ⅱc・Ⅲ式並行期（刺突文系土器群展開・終焉期（a～d類） 押引刺突文系土器群出現・展開期（e～h類） 無文系土器群出現～終焉期（i～l類））

Ⅲ期：大歳山式並行期（押引刺突文系土器群終焉期（h類））

各期の様相⁽¹³⁾としては、Ⅰ期に刺突文系土器群が他分類に先行して出現する。

Ⅱ期には刺突文系土器群の口唇部へ施文が施されるほか、押引刺突文系土器群および無文系土器群が出現する。押引刺突文系土器群は刺突文系土器群同様に、Ⅱ期において口唇部への施文が施されるなど、出現・展開する様相を呈する。無文系土器群は同様にⅡ期中に出現し、展開するが、Ⅲ期には現在のところ確認できない。

Ⅲ期資料は層位事例が少なく、明確な資料は1遺跡のみであるが、多条化した押引刺突文系土器群が確認できる。厚い器壁で口縁・口唇部に施文を施し、隆帯を有している。Ⅱ期押引刺突文系土器群と施文方法や隆帯の貼付け方法に共通点⁽¹⁴⁾が認められ、Ⅱ期の押引刺突文系土器群との連続性が想定できる。

7. おわりに

以上、月崎下層式について、標識遺跡となる月崎遺跡の様相を整理し、山陰地方および西部瀬戸内地域の資料から諸属性を抽出し、分類を実施した。また、設定した分類と前後の土器型式の層位的な共伴関係について整理を行った。その結果、従来、北白川下層Ⅲ式（里木Ⅰ式）に先行する土器型式として認識されていた月崎下層式が北白川下層Ⅱa・Ⅱb式（磯ノ森式）期から大歳山式期まで存続する土器型式である可能性を指摘した。縄文施文を主とする近畿系土器型式とは異なる系統である月崎下層式が山陰および西部瀬戸内の地域的な土器型式として存在していた可能性も想定できる。なお、月崎下層式の成立起因として、九州

地方の曾畑式の影響が指摘されている（宮本1993a ほか）。筆者も条痕調整や施文、器形の類似からその可能性を想定しているが、九州および近畿の広域に分布する土器型式の境界に位置する当該地域の環境をふまえると、両地域の影響を受けている可能性が高い。また、中部瀬戸内に主体的に分布する彦崎 Z1 式との関係性について、本稿では扱えなかった。これらの点について課題とし、改めて取り組みたい。

謝 辞

本稿をなすにあたり、柳浦俊一氏から多岐にわたるご指導を賜りました。また、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターから当時整理中であった上ノ谷遺跡出土遺物の掲載のご高配を賜りました。以下の方々も機関からも資料調査および学会発表の際にご指導・ご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。（敬称略 五十音順）

有松 唯 野島 永 真木大空 村田 晋

広島大学人間社会科学研究科・文学部考古学研究室 中四国歴史学地理学協会考古学部会

本稿執筆中の2021年8月に竹広文明先生がご永眠されたとの訃報が届いた。在学中には多くのことをご教示いただき、その際に与えられた知識が本稿執筆の一助となった。ご冥福をお祈りいたします。

註

- (1) 岡山県里木貝塚では、彦崎 Z1 式が里木 I 式よりも下層で出土するため、彦崎 Z1→里木 I 式と編年されているが、両型式の土器がそれぞれ単独で出土するのではなく、里木 I 式を主体とする層でも彦崎 Z1 式が出土することが報告書（倉敷考古館1971）でも確認できる。彦崎 Z1 式についても里木 I 式に先行する土器型式と評価するよりも、先行して確認できる土器型式であるものの、両者は同時並存する土器型式の可能性が残る。
- (2) 下山遺跡では、月崎下層式は第2ハイカ下層の第3 黒色土で出土している。第3 黒色土は縄文時代前期初頭～前期後葉の土器型式が確認でき、月崎下層式は第2ハイカ層直下で検出した遺構に伴って出土している。第2ハイカ降下直前まで使用されていた土器型式と推測できる。
- (3) 上ノ谷遺跡は飯南町下来島地内に所在する縄文時代前期から古墳時代後期までの遺構・遺物を確認した遺跡である。縄文時代前期の遺物は第2ハイカの前後に堆積する土層（第2・3 黒色土）から出土している。第3 黒色土は西川津式を中心に出土し、月崎下層式は出土しない。これに対し、第2 黒色土は月崎下層式以外の出土土器型式は縄文時代後期に比定される。このことから、月崎下層式が第3 黒色土からの流入ではなく、第2 黒色土に伴う土器型式であるといえる。
- (4) 宮本氏は西部瀬戸内地域の刺突文系土器群について型式名を言及していない。しかし、宮本氏が挙げた刺突文系土器群のうち、刺突文（江口 Z9 類）と押引刺突文（江口 Z10 類）の器面調整はナデ主体となる彦崎 Z1 式とは異なり、条痕調整が基本となる。このような特徴は、月崎下層式で確認できるものであり、宮本氏の指摘する刺突文系土器群は月崎下層式に比定できる。
- (5) 宮本氏の指摘（宮本1993a ほか）によると、月崎下層式に施される刺突文は下から上方向に施されるとしている。しかし、実見した資料では上から下方向に施す状況が確認できる。
- (6) 島根県飯石郡飯南町板屋Ⅲ遺跡などの島根県内出土の彦崎 Z1 式と報告されている土器片の実見を実施

- し、施文原体の確認を行った。その結果、半裁竹管状工具による施文が施されており、巻貝を主体とする月崎下層式との差異を確認した。
- (7) 刺突文や押し刺突文については、直線や波状、斜交など、施文パターンにバリエーションが確認できており、今回提示した資料のさらなる細分や施文パターンの変遷の検討などが可能である。今後の課題としたい。
- (8) 月崎遺跡出土資料との対応として、第1群がa類、第2群がb類、第3群がc類、第4群がe類、第5群がf類、第6群がh類となる。
- (9) 島根県古代文化センター（2014）文献。
- (10) 郷路橋遺跡は複数の調査区で発掘調査を実施しており、このうちD～G区については土層相関図が示され、共通する黒色土（第1～第5）が設定されている。しかし、実際に出土する土器型式に齟齬があり、D・E区第3黒色土とF・G区第2黒色土が対応することが指摘されている（柳浦2001）。本稿も柳浦氏の指摘をふまえ、相伴土器型式の確認を行った。
- (11) 北白川下層Ⅱc・Ⅲ式と月崎下層式の詳細な並行関係については、有効な層位事例が確認できなかった。有効な資料の増加を待ち、改めて整理したい。
- (12) 上ノ谷遺跡では第2黒色土から大歳山式が出土しておらず、月崎下層式が第2ハイカ降下後の大歳山式出現以前の短期間使用された土器型式である可能性も残る。
- (13) 本稿では示さなかったが、月崎下層式の区分として設定したⅡ期・Ⅲ期において、各土器群（刺突文系・押し刺突文系・無文系）に器壁厚の変化や口縁部施文条数の多条化など、発達の様相が確認できる。特に、Ⅲ期としたh類資料の口縁部施文はすべて5条以上の押し刺突文が施されるが、Ⅱ期中の押し刺突文は2条～4条を基本とし、5条以上の施文が施される資料は少ない。このことから、さらなる細分が可能である。有効な層位事例の増加を待ち、改めて検討したい。
- (14) Ⅱ期資料である下山遺跡などの資料では、隆帯を施す場合、口縁部施文範囲のみでなく、口唇部にも隆帯がおよんでいる。Ⅲ期の隆帯も同様に口唇部から口縁部施文範囲にかけて隆帯が貼り付けられており、共通点が指摘できる。連続的な資料群として位置付けが可能である。ただし、押し刺突文の多条化など、Ⅲ期資料は発達した様相も示す。

参考文献

- 網谷克彦 1994 「北白川下層式土器」『縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ』雄山閣出版、201頁～223頁。
- 網谷克彦 2003 「山陰地方中央部における北白川下層式系土器の編年学的研究」『立命館大学考古学論集』Ⅲ、43頁～64頁。
- 倉敷考古館 1971 『里木貝塚 倉敷考古館研究集報』第7号。
- 潮見 浩 1968 「月崎遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会、37頁～70頁。
- 潮見 浩 1980 「本州西端地域の縄文前期土器」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会、25頁～38頁。
- 島根県古代文化センター 2014 『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集。
- 宍道正年 1974 『島根県の縄文土器集成』Ⅰ。
- 宍道正年 1980 「島根県の縄文土器の研究—編年を中心として—」『松江考古』第3郷、松江考古学談話会、35頁～69頁。
- 竹広文明 1996 「月崎下層式土器」『日本土器辞典』雄山閣出版、89頁。
- 中四国縄文研究会 2001 『三瓶山周辺の縄文遺跡』。
- 中四国縄文研究会 2018 『中四国地方の外来系土器』。

- 中越利夫 1985 「帝釈峡遺跡群出土の縄文前期土器の研究(1)」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅷ、広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、65頁～90頁。
- 中村 愿 1994 「曾畑式土器」『縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ』雄山閣出版、224頁～235頁。
- 幡中光輔 2014 「自然災害と地域社会の定着性—三瓶山の噴火からみた縄文社会—」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集、島根県古代文化センター、77頁～86頁。
- 水ノ江和同 1990 「西北九州の曾畑式土器」『伊木力遺跡』同志社大学考古学研究室・多良見町教育委員会、449頁～471頁。
- 水ノ江和同 2012 『九州縄文文化の研究—九州からみた縄文文化の枠組み—』雄山閣。
- 宮本一夫 1987 「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度、京都大学埋蔵文化財研究センター、67頁～90頁。
- 宮本一夫 1993a 「瀬戸内の縄文時代前期の地域様相—江口貝塚の事例を中心に—」『斎灘・燧灘の考古学』大西町教育委員会、18頁～43頁。
- 宮本一夫 1993b 「縄文時代前中期の江口貝塚—第2次・第3次調査の成果と課題—」『江口貝塚Ⅰ—縄文前中期編—』愛媛県越智郡波方町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室、149頁～152頁。
- 柳浦俊一 2001 「山陰地方における縄文前期土器の地域編年」『島根考古学会誌』第18集、島根考古学会、15頁～51頁。
- 柳浦俊一 2017 『山陰地方における縄文文化の研究』雄山閣。

遺跡文献

- 山口県** 1:潮見 浩1968「月崎遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会。2:山本一郎1978「神田遺跡」『山口県先史時代済州遺物集成ならびに編年的研究』周陽考古学研究所。3:高橋慎二1978「美濃ヶ浜遺跡」『山口県先史時代済州遺物集成ならびに編年的研究』周陽考古学研究所。4:前島高雄1978「黒島浜遺跡」『山口県先史時代済州遺物集成ならびに編年的研究』周陽考古学研究所。
- 大分県** 5:大分県東国東郡国東町教育委員会1990『羽田遺跡(Ⅰ地区)国東富来地区県営圃場整備事業関係発掘調査報告書』。
- 愛媛県** 6:愛媛県越智郡波方町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室編1993『江口貝塚—縄文前中期編—』。
- 広島県** 7:広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1981『帝釈峡遺跡群発掘調査年報』Ⅳ。8:広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室1995『帝釈峡遺跡群発掘調査年報』Ⅹ。
- 島根県** 9:匹見町教育委員会1999『中ノ坪遺跡』。10:柿木村教育委員会1996『向井津原遺跡発掘調査報告書(第3次)』。11:匹見町教育委員会1987『新榎原遺跡発掘調査報告書』。12:匹見町教育委員会1996『ダヤ前遺跡』。13:島根県教育委員会1991『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ。14:仁摩町教育委員会2005『仁万大橋遺跡 善興寺橋遺跡』。15:島根県教育委員会2002『下山遺跡(2)—縄文時代遺構の調査—』。16:島根県教育委員会1998『板屋Ⅲ遺跡』。17:島根県教育委員会2003『板屋Ⅲ遺跡(2)—縄文時代～近世の複合遺跡の調査—』。18:島根県教育委員会2023『猪子原遺跡上ノ谷遺跡 高城跡 小原遺跡』。19:仁多町教育委員会1981『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』。20:島根県教育委員会2003『尾白Ⅰ遺跡 尾白Ⅱ遺跡 家ノ脇Ⅱ遺跡3区 川平Ⅰ遺跡』。21:島根県教育委員会2005『宮ノ脇遺跡 家の後Ⅱ遺跡1』。22:島根県教育委員会2007『家の後Ⅱ遺跡2 北原本郷遺跡2』。23:島根県教育委員会2009『山持遺跡 Vol.5(6区)』。24:島根県教育委員会2012『山持遺跡 Vol.8(6、7区)』。25:鹿島町教育委員会1993『佐太講武貝塚発掘調査報告書』。26:島根大学埋蔵文化財調査研究センター1997『島根大学構内遺跡第1次調査(橋縄手地区1)—宍道湖北東側における「縄文海進」期低湿地遺跡の調査—』。

27：島根県松江土木事務所1969『寺ノ脇遺跡 県道松江一境線改良工事埋蔵文化財緊急調査報告』。28：島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005『崎ヶ鼻洞窟遺跡 佐々木謙・寄贈資料』。29：島根県古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009『サルガ鼻洞窟遺跡・権現山洞窟遺跡』。30：島根県教育委員会1995『オノ神遺跡 普請場遺跡 島田黒谷Ⅰ遺跡』。31：宍道正年1974「郡山遺跡」『島根県の縄文土器集成』Ⅰ。32：柳浦俊一・米森恭子2001「隠岐郡西郷町宮尾遺跡出土の縄文土器について」『島根考古学会誌』第18集。

鳥取県 33：米子市教育委員会1986『目久美遺跡』。34：米子市教育委員会2003『目久美遺跡』Ⅸ・Ⅹ。35：米子市教育委員会1984『陰田一一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』。36：財団法人鳥取県教育文化財団1985『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』。37：福部村教育委員会1989『栗谷遺跡発掘調査報告書』Ⅱ。

挿図出典

第1図1～3…遺跡文献18 第2図1～35…遺跡文献1 第3図…筆者作成 第4図…筆者作成 第5図…遺跡文献を基に筆者作成 第6図1…遺跡文献35、2・5・6…遺跡文献9、3…遺跡文献13、4…遺跡文献15 第7図…筆者作成 第8図…筆者作成 第9図…実見した資料をもとに筆者作成 第10図1・3…筆者作成、2・4…筆者撮影 第11図1…遺跡文献2、2…遺跡文献28、3…遺跡文献17、4・5・13・16…遺跡文献33、6・11…遺跡文献6、7…遺跡文献5、8・12…遺跡文献15、9…遺跡文献9、10…遺跡文献13、14…遺跡文献1、15…遺跡文献18、17・18…遺跡文献35 第12図1～3・9・10・17・18・20～22…遺跡文献13、4・5・11・12・28…遺跡文献6、6～8…遺跡文献35、13～15・23～26…遺跡文献5、16…遺跡文献33、19…遺跡文献1、27…遺跡文献23 第13図1・14…遺跡文献29、2～4・26・27・29～31…遺跡文献15、5・6・32…遺跡文献16、7・17…遺跡文献35、8…遺跡文献8、9・19…遺跡文献6、10・11…遺跡文献2、12・22…遺跡文献4、13・20・21・23・37・38…遺跡文献1、15・16…遺跡文献13、18・36…遺跡文献33、24・25…遺跡文献17、28・34…遺跡文献23、33…遺跡文献18、35…遺跡文献24 第14図1…遺跡文献9、2…遺跡文献13、3～5・10・11…遺跡文献6、6・7・12・14・23…遺跡文献17、8…遺跡文献35、9・15…遺跡文献5、13・17～20…遺跡文献16、16…遺跡文献15、21・22…遺跡文献3 第15図…筆者作成 第16図…筆者作成 第17図…筆者作成 第18図…筆者作成

第1表 対象資料一覧

地域	遺跡名	a類	b類	c類	d類	e類	f類	g類	h類	i類	j類	k類	l類	不明	文献
山口県	月崎遺跡	1	1	1	0	7	16	0	9	0	0	0	0	11	遺跡文献1
	神田遺跡	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	遺跡文献2
	美濃ヶ浜遺跡	1	1	0	0	1	0	2	1	0	0	0	2	0	遺跡文献3
	黒島浜遺跡	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	遺跡文献4
大分県	羽田遺跡	0	19	0	9	0	1	1	3	0	1	1	0	12	遺跡文献5
愛媛県	江口貝塚	1	3	1	1	1	1	0	0	7	2	0	0	6	遺跡文献6
広島県	帝釈穴神岩陰遺跡	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	遺跡文献7
	帝釈弘法滝洞窟遺跡	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	遺跡文献8
島根県	中ノ坪遺跡	0	2	0	0	3	5	1	2	1	0	0	0	1	遺跡文献9
	向津原遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	遺跡文献10
	新横原遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	遺跡文献11
	ダヤ前遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	遺跡文献12
	郷路橋遺跡	3	3	2	5	0	5	0	2	1	0	0	0	7	遺跡文献13
	仁万大橋遺跡	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	遺跡文献14
	下山遺跡	0	0	0	0	6	1	3	8	0	0	0	3	3	遺跡文献15
	板屋Ⅲ遺跡	1	0	1	0	3	1	3	1	0	2	3	7	9	遺跡文献16・17
	上ノ谷遺跡	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	遺跡文献18
	下鴨倉遺跡	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	遺跡文献19
	川平Ⅰ遺跡	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	遺跡文献20
	家の後Ⅱ遺跡	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	遺跡文献21・22
	山持遺跡	0	0	0	1	0	0	2	2	0	0	0	0	0	遺跡文献23・24
	佐田講武貝塚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	遺跡文献25
	島大構内遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	遺跡文献26
	寺ノ脇遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	遺跡文献27
	サルガ鼻洞窟遺跡	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	遺跡文献28・29
	島田黒谷Ⅰ遺跡	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	遺跡文献30
	郡山遺跡	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	遺跡文献31
宮尾遺跡	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	遺跡文献32	
鳥取県	目久美遺跡	0	2	0	0	0	4	1	5	0	0	0	1	3	遺跡文献33・34
	陰田遺跡群	4	1	1	0	1	3	0	0	0	1	0	0	3	遺跡文献35
	上福万遺跡	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	遺跡文献36
	栗谷遺跡	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	遺跡文献37

集計は胴部片は除く

Re-evaluation of the Tsukizaki-kasō Type Pottery

Takuya IMAFUKU

The objective of this study is to reevaluate the Tsukizaki-kasō type pottery of the Early Jomon period, which has been recognized as a pottery style with a certain duration of existence through excavations. In order to reevaluate the Tsukizaki-kasō pottery, we first analyzed pottery excavated from the Tsukizaki site in Ube City, Yamaguchi Prefecture, which is in the possession of the Hiroshima University Department of Archaeology, and extracted groups based on multiple aspects of analysis. Then, based on the Tsukizaki-kasō type pottery excavated in the San'in region and the western part of the Seto Inland Sea, which has a known concurrent relationship with other types, and the chronology of the excavated layers, we confirmed what the extracted differences indicated.

As a result, it was confirmed that the Tsukizaki-kasō type pottery was a type that lasted longer than previously thought. It was also concluded that it was a pottery type associated with different lineages and may have existed as a border area pottery type, influenced by the pottery styles of the Kinki and Kyūshū regions.